

報告 オンライン哲学対話は続く ～「ソフィア哲学カフェ」「シネマ哲学カフェ」報告～

寺田俊郎

はじめに

2020年はオンライン哲学カフェ元年だった。本年度も、引き続き新型コロナ感染状況を考慮して、「ソフィア哲学カフェ」「シネマ哲学カフェ」は全てオンラインで実施した。その実施方法の変更に伴う長所、短所は、昨年の経験とほぼ同じである。オンライン哲学カフェには、同じ空間に身を置き、生の声を聞きあい、表情や身振りも交える通常の哲学カフェと比べると、臨場感に欠けるためか、理解不足や誤解が起こりやすいという短所がある。他方、オンラインゆえに逆に話しやすくなることがある、声が聞こえやすい、遠くからでも参加できるなどの長所もある。これから対面の哲学カフェが戻ってきても、オンラインの哲学カフェも存続していけよう、という見通しに変わりはない。幸い、進行役自身もオンラインの対話に慣れてきて、昨年度経験したような大失敗は経験せずに済んだ。そこで、本報告では、本年度の内容を簡単に紹介した後で、哲学対話の意義について考察してみたい。

本年度の内容

本年度実施した行事は以下のとおりである。進行役は所員の寺田俊郎と客員所員の堀越耀介が務めた。

2021年6月4日 ソフィア哲学カフェ：テーマ「姓（名前）」

2021年10月22日 ソフィア哲学カフェ：テーマ「多様性」

2022年1月17日 ソフィア哲学カフェ：テーマ「映画『太陽の子』をめぐって」

2022年2月24日 シネマ哲学カフェ：『Hafu ハーフ』

「姓（名前）」の回と「多様性」の回は通常の哲学対話、「太陽の子」の回は12月に実施されたIGC主催の『太陽の子』上映会を受けての哲学カフェ、シネマ哲学カフェは恒例の映像作品を鑑賞しての哲学対話であった。

映画『太陽の子』は、アジア太平洋戦争末期に京都帝国大学で原子爆弾の研究に携わっていた学生、その弟、幼馴染の女性を中心に描かれる青春群像である。総合グローバル学部の学生二人が中心になって企画したものだが、考えさせられることの多い作品だったため、急遽ソフィア哲学カフェで取り上げることにした。そのため広報の期間が短く、参加

者が少なかったのが残念だったが、意義深い対話になった。

まずは、各自の感想を語り合うことから始め、核兵器が非人道的な兵器であり、その悲惨な被害を二度と繰り返してはならないのはもちろんだが、核兵器を考える視点には、たとえば科学の進歩という視点など、さまざまあり、それらの視点からもよく考えないと核兵器廃絶の意義を人々に納得してもらうことはできないのではないか、などの論点について考えた。ぼくが最も考えさせられた問いは、科学の研究の発展の結果非人道的な結果が出てくることが予想される、または実際出てきた場合、科学者はどうするべきなのか、あるいは、その研究の結果にどのような責任を負わなければならないのか、というものである。この問いは原子エネルギーの研究に顕著に見られるが、他のあらゆる科学研究に付きまとう問いでもある。

シネマ哲学カフェで取り上げた作品は、昨年度と同じ映画上映会サイトが提供するものの中から選んだ。このサイトでは、ドキュメンタリー映画を中心に、たいへん心惹かれる映像作品が提供されている。今回の「Hafu ハーフ」は、日本人と外国人を両親にもつ四人のミックス・ルーツの若者たちの生き方を描くドキュメンタリーである。数年前、哲学対話実践の仲間がこの作品をもとに哲学対話を実施したことがあり、記憶に残っていた。

シネマ哲学カフェに固有の短所である「対話の時間が限られていること」は今回も痛切に感じられたが、それでも、自身ミックス・ルーツをもつ参加者の発言も多数あり、興味深い対話をすることができた。その中で、あなたはあなたであり、わたしはわたしであり、どのようなルーツをもとうと一人の人として遇しあえばいいはずなのに、人はなぜルーツにこだわってしまうのだろうかといった問いが浮上してきた。ぼくが考えさせられたのは「見かけ」というものが非常に大きな意味をもつということだ。ミックス・ルーツの人の中でも、見かけが日本人らしい人には生じない問題が、見かけが日本人らしくない人には生じる。そう言えば、同じことを「差別」の回で言っていた参加者がいた。人間はなんと「見かけ」に左右される動物だろう。

最後に、「姓（名前）」の回について、進行役の堀越さんによる、対話の様子をわかりやすく伝える報告があるので、それに基づいて対話の内容を紹介しよう。昨今の「選択的夫婦別姓」の議論を背景にテーマ設定したもので、15名ほどが参加した。「姓」だけでなく、名前そのものの意義にも話題が及ぶとも想定されたが、やはり社会的・政治的な意味で「姓」が存在し、婚姻によってそれが変えられること、同姓であることを強制されることについて、主に議論された。

対話は、参加者が「姓の変更を迫られることによって、これまでの自分を否定され、それとは違う者であるように強制されていると感じた」という経験や、「姓が同じというだけで全く自分とかかわりのない親族と墓を同一にするかどうかなどの問題に引きずり込まれるが、逆に言えば、その程度の問題としか思わない」といった具体的な経験を語るころから始まった。

こうした経験を分析していくと、道具的・先天的に決定されたはずの「姓」には、一見、単に呼称としての役割しかないように思われても、何らかの意味での「アイデンティティ」が付随していることも明らかになった。それは、これまでやってきたこと、経験の積み重ねであるこの自分のポジティブなアイデンティティという意味であることもあれば、血縁関係のしがらみが載せられたネガティブなアイデンティティであることもある。

前者の場合には、姓の変更を迫られることは不利益でしかない。同一姓による「家族の一体感」のような臆見・レトリックがしばしば聞かれこともあるが、姓の変更を迫られた側からすれば「一体感」などなく、それはむしろ自分ではない名前に対しての「違和感」としてしか感じられない。また、後者の場合であっても、それは血縁の姓に縛り付けられることから生じる不利益のように思われ、個人の意思で変更することのできる制度であれば、やはりある程度解消可能な問題であるという意見が聞かれた。

同姓を積極的に支持する見解が聞かれなかったため、あらゆる観点を検討したとはいえませんが、今回の哲学カフェでは、「非選択的な夫婦同姓」、もっと言うと、「姓」を強制されることに対する違和感や不利益の側面を中心に対話をすることができた。

哲学対話の意義

最後に、「ソフィア哲学カフェ」や「シネマ哲学カフェ」も含め、哲学対話を実施することの意義について、簡単に考えたい。いつもカフェの準備や運営の支援をしてくれる IGC の研究補助員の菊地了さんが、「多様性」の回の後で、哲学対話には「認知の主体」の形成と「倫理の主体」の形成という意味があるように思うが、両者の関連に興味がある、との感想をもらった。たいへん心惹かれる問題提起であるので、その観点から考えてみたい。

哲学対話の実践には、確かに、一方では、認識の主体あるいは認識的主体性、他方では、倫理の主体あるいは倫理的主体性、それぞれの形成を促す働きがある。哲学対話の研究者・実践者の中にも、そのいずれか、または両方を強調する人が多い。ぼくは、両者は不可分の関係にあると考える。たとえば子どもの哲学対話の創始者と言われるマシュー・リップマンは「探求の共同体」という概念で哲学対話の意義を表現したが、そこには、認識の主体が正しい認識、つまり真理に近づいていくことができるのは、他の主体との共同的思考によるしかなく、その方法是对話であるという根本的な想定がある。他の主体との共同的思考を規定する規範は、倫理的規範以外の何物でもなく、認識の主体がその目的を達するためには倫理の主体でもなければならぬということになる。

では、倫理的主体性を確立しなければ認識的主体性を形成することができないのだろうか。そうではないだろう。両者は、他の人々との相互関係の中で、ともに育っていくもので、つねに形成の途上にあるものだと考えられる。どちらが先、どちらが後、ということはないのではないだろうか。認識の主体として真理を探究することと倫理の主体として善を実践することは常に相俟いあって生じ、育つのである。

さて、そのように真理を探究し善を実践しようとする動機、認識的主体性や倫理的主体性を形成しようとする動機は何だろうか。それは、まず、教育一般の動機と同じく社会的なものであり、主体の外から与えられる。個々人が認識的主体かつ倫理的主体として成長することは、社会的共同のために要請され、教育の目標として課せられる。そして、そのための優れた方法の一つが哲学対話だとすれば、哲学対話はもっと公私にわたる教育に取り入れられるべきである。

しかし、認識的主体性や倫理的主体性を形成する動機は、社会的・外的なものだけではないだろう。個人的・内的な動機もある。その一つは「驚き」である。人間と人間を取り巻く世界、その中で生きる自己と他者をめぐる様々な謎と驚異、その謎と驚異に対する「なぜ?」「なに?」「どのように?」という問い、そして、その問いに対する答えがさまざまであることに対する驚き。そこから認識と倫理の探究が始まる。子どもの哲学対話の研究者・実践者であるスーザン・ガードナーの言葉を借りれば、人間とそれを取り巻く世界、その中で生きる自己と他者の「複雑性」に気づきそこから始まる探求。

その探求は真理を目標とする。むろん探求の最中には何が真理であるかはまだわからない。しかし、探求が真理へと向かっていることを探求に携わる人々は了解している。つまり、今自己と他者がもっている不完全な意見をもとに、もっと完全な意見をつくっていくことができること、よりよい意見をつくっていくことができることを了解している。それは、真理を前提しているということである。その目標としての真理がどのように与えられるのかは、ぼくもまだよくわからない。それは神のような超越的なものだという答えもあるだろうし、我々の探究を可能にする条件であり、超越論的なものだという答えもあるだろう。

いずれにせよ、ここで一つ忘れてたくないことがある。それは、認識の主体、倫理の主体として成長することは、快いことだということである。それは一種の解放である。ヨハネによる福音書に言う「真理はあなたがたを自由にする *veritas liberabit vos*」をその意味に解することもできよう。真理の探究の中でわれわれはともに自由になる。「真理はわれわれを自由にする *veritas liberabit nos*」のである。なぜなら、真理の探究の中で、われわれは自身が不完全な認識つまり偏見しかもちあわせていないことに気づき、その意味で真理の前に平等であることを知り、真理の探究者として対等であることを認めあい、それにふさわしく遇しあうことによって、不完全な意見から解放されて完全な意見に近づいて行くことができるのだから。

このように、他の自由な主体たちとの交流の中で主体性を形成するのは、どの文化でも同じはずだが、それが、日本では独立した個人の連帯の方に行かず、馴れあう個人の空気の方に流れてしまうのが、興味深いところだ。丸山真男が「日本文化の執拗底音」と呼んだものに、江戸時代に長く続いた泰平の世の封建体質が加わり、近代の天皇制がそれを強化したのではないかと推測してみたりするが、これは歴史家の研究をもっと参照して

からでないとは明言できない。が、とにかくこのような傾向をもつ日本社会では、哲学対話の意義はいつそう深まるように思われる。

寺田俊郎（てらだ としろう）（グローバル・コンサーン研究所・上智大学文学部）